

## 珠光院貞姫の御前会議

西 羽 晃

前回に述べましたように慶応4（1868）年1月10日、桑名城内では新政府軍に恭順するか、抗戦するか、議論が沸騰して結論が出ません。そのため藩主の先祖を祀る鎮国守国神社で「おみくじ」を引いた結果、「江戸へ集まり戦うべし」との結論となりました。団体行動では目立つので、各自が思い思いに江戸を目指すことになり、酒樽を割って別れの酒を酌み交わしました。

ところが、これに反対する下級武士たちが集まり、協議しました。戦争となれば、第一線に出て殺されるのは下級武士なのです。まさに命がけです。それに相手は天皇の軍隊です。薩摩・長州は憎いけれど、天皇に手向かうことはできません。しかし、神社の「おみくじ」での結論を覆すのは容易ではありません。知恵を絞った結果、前藩主夫人の珠光院貞姫に訴え出ました。この時に藩主の松平定敬は不在なので、藩主家として桑名城内に居たのは、珠光院と子供たちでした。藩主不在なので、珠光院が松平家の最高の地位にあったと言えます。

11日珠光院が出席しての御前会議が開かれて、珠光院の意向で結論が覆りました。即ち、戦わずして桑名城を開城することになったのです。しかし抗戦派の藩士たちは、あくまでも戦うことを主張し、藩の中は混乱を極めました。このように藩内を混乱に陥れた責任をとって、山本主馬と小森九郎右衛門は城内で切腹してしまいました。

珠光院は信州松代藩・真田家の娘で、桑名藩主松平定猷と結婚した人です。実父の真田幸貫（松平定信の子）は佐久間象山を登用したような開明派の人でした。珠光院も実父の影響を受けて、世界の情勢を知り、今までの幕府の体制が変わることを予想していたのでしょうか。しかし、無用な戦いで、無駄な命をなくすことは、女性として耐え難く、「戦わずして開城」することを彼女が決断したと思われます。

明治4（1871）年、廃藩置県が行われ、元の藩主家は東京に住むことが命じられました。しかし珠光院は病氣と称して桑名から離れませんでした。幕末からの薩摩・長州は欺瞞に満ちた方法で幕府を倒してきたのです。こんな薩摩・長州が中心となった新政府に彼女は馴染めなかったと思われます。明治9年11月12日に桑名で逝去し、松平家の菩提寺である照源寺に葬られました。今も照源寺の松平家墓地に彼女の墓があります。

彼女は松代で生まれ、結婚生活は江戸で暮らし、幕末に桑名へ移ってきたのです。本来的に桑名という土地には馴染みが薄いのですが、最後まで東京へ行

かず、桑名で過ごしたのは何故でしょうか。薩摩・長州が作り上げた新政府に対するレジスタンスだと、私は考えています。



照源寺にある珠光院の墓  
明治以前の女性は結婚しても  
実家の姓のままだった。